みらい

奈良春水

「あーあ、やっぱあれ、オフサイドじゃ無かったよなぁ」
　達也が、ぼそっとつぶやいた。
「まだ、そのこと言ってんのかよ。もういいじゃん、終わったこと、終わったこと。なあ、豪もそう思うだろ？」
　翔太がそう言って話を俺にふってきた。
「まあ、相手を少しでも焦らせただけでも、俺ら的には勝ったようなもんじゃん。上出来だよ、上出来」
「はあ・・・・でも、やっぱオフサイドじゃなかったような・・・・なんか、マジ悔しいわぁ」
　達也はまだ愚痴ってたけど、その悔しいって気持ちだけは俺や翔太にもわかる。
　今日は、夏のインターハイをかけた県予選の初戦だった。俺たち三年生のとっては最後の大会だった。
　といっても、俺たちの高校のサッカー部のレベルじゃ全国大会なんて程遠い。だから正しくは、インターハイをかける、というより、目指す、というより、夢見る程度のものだ。
　おまけに初戦の相手は、毎年のように県予選で上位に入っている私立の高校だった。どうしようもなく最悪だった。相手が控え主体のメンバーを送り出してきても、俺も達也も翔太も、というかチーム全員が勝てるなんて思っていなかった。
　けど、試合は思いのほか拮抗した。前半はひたすら守った末に〇対一。ハーフタイムには「なんか、いけるかも」という空気がチームにはあった。後半も相変わらず攻められっぱなしだったけど、相手はことごとくシュートをミスしてくれた。
「サッカーの神様が味方してくれてるのかも」
　マジ、そう思った。
　で、時間は進んで、ロスタイムにそれは起きた。俺が敵から奪ったボールを、苦し紛れに前に蹴り出した。そしたら、それがたまたま達也の方へ飛んで、達也が走ってボールを受けて、キーパーと一対一になった・・・ところで笛が鳴って、サイドを見るとフラッグが上がってそのまま試合終了、というわけ。達也は審判に何か言いたそうだったし、相手のベンチはホッと胸をなで下ろしているように見えたし、それに周りで応援している人たちがざわついていた。
　だから、もしかしたら、あれが本当はオフサイドじゃなくて、達也のシュートが決まって、同点で、延長に入って・・・やめた。翔太が言うように、もう終わったことだ。いまさら考えてもしょうがない。
　俺は話題を変えたくて「で、おまえらこれからどうするの？」と聞いた。
「はあ？どうするって、試合終わったから、いまは家に帰る途中だろ」
　達也が当たり前のように言った。バカだ、こいつ。三年間一緒にいたけど、達也のこのアホさ加減は逆にソンケーするレベルにまで達している。
「そうじゃなくて、これで部活も終わりだし、学校卒業したらどうするのって聞いてんだよ。うちの高校のエリート君は」

翔太が間に入ってくれた・・・てゆーか、なんだ、いまの言い方は。翔太とも三年間一緒だったけど、相変わらずこの皮肉な性格は変わらない。
「あー、はいはい、そーゆーことね。やっぱり、頭がいい人は考えることが違うねぇ」
「ばーか、マジメに聞いてんだよ」
「わかってるよ。俺はまあ、親父の後継ぐよ。てか、それしか道ないし。いまどき酒なんて古くてメンドいけど、いまの時代、職があるだけでも有難いから」
達也の家は、この町に古くからある酒の蔵元だ。親父さんが確か四代目だったから、達也が継げば五代目ということになる。
一年の頃は「ぜってぇー、あんなオンボロ酒屋なんか継がねぇー」とか言ってたくせに。やっぱ、継ぐんじゃん。でも、達也のアホさ加減はマジでハンパないから、継いだ途端のお酒の味が落ちて、で、経営が傾いて倒産なんてことになっちゃうかも・・・・なんちゃって。
俺は次に「で、翔太は？」と聞いた。
「俺？俺はほら、前から言ってんじゃん。介護の仕事がしたいって。だからまあ、とりあえず県内のそっち系の専門行くってことで」
去年亡くなった翔太のおばあちゃんは、亡くなる一年ほど前から自宅で介護を受けていたらしい。だから翔太も手伝ったりして、それで介護の仕事がしたいと思ったらしい。
まあ、翔太は皮肉多いけど、その分お茶目なところもあるしな。で、だからなのか、やたら年上にモテるし。この前、駅前で綺麗な女の人と歩いてるの見かけたけど、あれ誰なんだよ、翔太。まあ、これはカノジョのいない俺のひがみも入ってんだけど。
でもまあ、翔太のことだ。将来は介護施設の職員になって、で、施設にいるおばあちゃんたちにモテモテで、おばあちゃんの寿命延びたりして。さすがにこれは強引な考えかな。でも、こっちは達也と違って、ちょっとリアルな感じがするかも。
俺がそんなことを頭で思っていたら、翔太が「豪は、やっぱり東京の大学に行くわけ？」と聞いてきた。「豪は頭マジでいいからなぁ。いいなぁ、東京かぁ。夢の一人暮らしじゃん」と達也が続けて。
「ばか、頭いいって言ってもうちの高校の中での話だろ。俺のレベルじゃ三流大学決定だよ。それに一人暮らし大変そうだし、金かかるし、いま考えただけでもちょっとヘコむわぁ」
そうは言ってみたものの、俺が東京の大学に行きたいのは事実だった。もっと言えば、正直大学はどこでもいい。とにかく、東京に行きたい。別にこの町が嫌いってわけじゃないけど、父ちゃんと母ちゃんが嫌いってわけじゃないけど、うまく説明できないけど、とにかく東京で一人で暮らしたい。
でもその反面、達也と翔太が羨ましかったりする。二人はちゃんと将来の道筋をつけた。目指すものが決まった。
じゃあ、俺は？
俺は将来何でメシ食っていくか決めてない。てゆーか、何になりたいのかもわからない。自分のことなのに、まだわからない。
東京行ったらわかるんだろうか？大学入ったら見つかるんだろうか？やりたい仕事が見つかっ

ても、それは東京でのことなのか？じゃあ、東京でずっと暮らし続けるのか？結婚は？東京の女の人と結婚するのか？子どもは？マイホームはいつ？その先は？その先は？
　あぁー、もう頭ん中ぐちゃぐちゃする。マジ、メンドくせー。
「なあ、ちょっと腹減らない？いまから駅前のマック行くのってどうよ？」
　俺は二人に問いかけた。
「いいねぇ」
「俺も腹減ったぁ。なに食おっかなぁ。ビックマックのセットに、あと単品でチーズバーガーとテリタマと・・・」
「翔太、おまえそれ食い過ぎぃー」
　こういう時に持つべきは、やっぱり一緒になってバカできる友だちだ。
　よし。
　俺は二人の会話を合図に駅に向かって走り出した。で、後ろを振り向いて言ってやった。
「じゃあ、マックまで競争ってことで。ビリの奴のおごりな」
「あ、ちょっと、豪、おまえ、ずりぃーぞ」
「そうだぞぉ」
　二人はそう言って、俺の後を追ってきた。で、俺たちは走りながら次々に叫んだ。
「あー、でも、ぜってぇーあれオフサイドじゃなかったって」
「まだ言ってんのー」
「いーじゃん、言わせとけぇ」
「あー、マジムカつくっ」
「そうだぁ、そうだぁ」
　将来とか、夢とか、なんか難しいから、いまは考えるの、やーめた。先生とか親が知ったら絶対怒るけど、とにかく、やーめた。先は長いんだし。まだ十代だし。青春だし。後で考えよっと。だから、まあ、いまは、とりあえず、マックってことで。
「なあ、あそこのマックに可愛い子いるの知ってる？」
　翔太が叫んだ。
「ああ、見た目２０代前半って子だろ」
「さすが年上にモテる奴は目ざといねぇ。狙ってんの？」
「ばーか、そんなんじゃねーよ」
「スマイル下さいってか？」
「豪、それいつの時代だよ。ふりーよ」
「よーし、じゃあ、達也、俺とお前でぜってぇ翔太の恋の邪魔しようぜぇ。協力しろよ」
「オッケー、賛成ぇー」
「お前ら、マジふざけんなよぉ」
　夏の始まりを予感させるような爽やかな向かい風が俺の頬に当たった。

（完）